



Echo No.141
平成28年 孟蘭盆

院寺寺
峰福林禅
一禅禅宗
羽村臨濟会

わが釈迦牟尼の声と姿と

お盆を迎え、羽村臨濟会のお寺では施
餓鬼法要が営まれます。お盆の施餓鬼法
要は本堂の使い方が普段とは異なります。

ご本尊様の前に施餓鬼棚を設置するので
はなく、本堂の外側に向けて施餓鬼棚を
設置しています。不思議なことに羽村市
内の四ヶ寺の本堂の正面は全て同じ方角
を向いているようですが、施餓鬼棚の向
こう側には、広々と地球の大地、大自然
が広がっています。

峰の色 谷の響きもみなながら
わが釈迦牟尼（しゃかむに）の
声と姿と
（道元禪師）

曹洞宗の開祖、道元禪師は全ての命あ

るものの仏としての姿を和歌に残されま
した。我々命あるものは全て仏であり、そ
の命を産み出し、育んでくれる山野の
青々とした森林、絶え間なく流れる谷川
の響きもすべてお釈迦様の説法であると
申しておられます。

我が町、羽村を走っている電車、青梅
線はホリデー快速なる便があり、週末と
もなると都内からハイキングに来る大勢
の乗客を乗せて走っています。羽村のチ
ューリップや桜のお祭り、多摩川の美し
い景色など、人間は大自然と相対した時

に、心の中で癒しを感じる生き物のよう
です。その癒しを感じる心こそ、塵や垢
のついていない、清浄なる仏の心だと言
えるでしょう。人間は高度な文明社会を
営んでいます。その文明社会の外側には
大自然の社会があります。我々人間も
大自然の一部なのであり、それは同時に
皆様が平等に大自然の恵みを受容し、仏
様の中で育まれている存在であることを
示しています。

施餓鬼法要は時に殺伐とした文明社会
の中での人間の心を、本来の大自然の一
部としての姿に立ち返らせてくれる法要
でもあります。我々人間を育んでくれる
大自然の中の全ての命に対して施餓鬼棚
を挟んで感謝の気持ちを送ることによっ
て、我々人間自身も、元々清浄な心を持っ
ていることを実感するための法要なので
す。

自然の一部となり、本来の自分に立ち
帰る。そんな夏になることを願っており
ます。
（宗禅寺 副住職 高井和正）

白隠禪師坐禪和讃を

読んでみる その4

衆生近きを知らずして

遠く求むるはかなさよ

例えば水の中に居て

渴を叫ぶが如くなり

長者の子となりて

貧里に迷うに異ならず

(白隠禪師坐禪和讃より抜粋)

※衆生——命あるすべての生き物のこと

自分探しの旅

ここ十五年ぐらいでしょうか。自分探しという言葉が世に定着しているようです。昔と違い、必ずしも家業を継がなくても良い時代となった象徴ともいえる言葉だと思います。自分がしたいことは何なのか？ 本当に今、勤めている会社でいいのか？ 結婚相手はこの人でいいのか？ 人生において重要な決断を迫られ

る時は誰にでも訪れます。確かに自分にとっての最良の地、自分の居場所はどこなのかというところで考えれば、文字通り人生というのは自分探しの旅であると言えます。しかしながら、自分探して大事なのは自分の外側だけと言い切ってしまうて良いのでしょうか。

人生を歩む中で、我々は自分自身の力だけではどうにもならない出来事に出くわします。会社の人事や自分の恋人や連れ合いの両親のこと、自然災害や自分の体の病気なども含まれてくるでしょう。残念ながら自分の外側、周囲の環境に起きることに對して、どうすることもできない自分がいるはずで

す。白隠禪師はそんな我々の事を、「水の中にいながら渴きを訴え」、「裕福な家庭に生まれながら、物乞いをしている」と坐禪和讃の中で例えておられます。

環境に左右されない自分を

白隠禪師は自分自身と向き合うことの

大切さを説いておられます。人任せの人生も、物任せの人生もないのです。自分の人生の主役は自分なのですよ、と。自分自身の人生に起きたことを他人や周囲の環境のせいにしてしまうのはいかにも容易いですが、自分の人生に起きた出来事を正直に真摯に受け止めていく心を誰もがしっかりと持つて忘れることを忘れてはいけません。自分と向き合うことによつて、自分の中にあるブレない自分、環境に左右されることのない絶対的な自分の心を見つけることができれば、どこにいても、どのような状況になつても、自分の持つていける力を出し切れる素晴らしい自分でい続けることができるような気が致します。

「おのれこそ おのれによるべ おのれをおきて 誰によるべぞ よく調えし おのれにこそ まこと得難き よるべを獲ん」

(宗禪寺 副住職 高井和正)

禅と共に歩んだ先人

まつ おお ば しょう 松尾芭蕉 I

臨濟禅と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、今回より江戸時代前期に生き、日本の俳諧(俳句)を芸術的域にまで高め大成させた「俳聖」とも呼ばれる「松尾芭蕉」を取り上げたいと思います。

その生涯

芭蕉は今の三重県伊賀市に寛永二十一年(千六百四十四年)に生まれました。名字帯刀を許されるそれなりの名家である農家の次男として育ちましたが、父を早くに亡くし、経済的に困窮したため、伊賀上野の侍大将藤堂家に出仕しました。そのあとつぎの藤堂良忠に仕え、事となった芭蕉(当時は宗房と名のついていた)は、良忠と共に京都の俳人「北村季吟」に師

事(弟子となること)し、俳諧に足を踏み入れます。十六才の時でした。そこで次第に頭角を顕していきます。季吟の下で俳句の腕を磨き続けていた芭蕉でしたが、主君である良忠が死去し、また季吟からもその才を認められ、俳諧作法書「俳諧埋木」の伝授(免許皆伝の意味を持つ)が行なわれた為、これを機に江戸へ向かうこととしました。三十才の時でした。江戸においては「松尾桃青」と名を改め、様々な文人、俳人と交流を深め、多くの影響を受けます。その中でも大きな事は臨濟宗の高僧、仏頂禅師との出会でした。

その頃、深川に住居していた芭蕉は、同じく深川の臨川庵に逗留していた仏頂禅師と出会い、その禅的世界に魅了され、禅師の下に参禅(禅の修業)して、その禅的境涯を高めたのでした。

深川の芭蕉の庵に、弟子の季下から芭蕉の株が贈られ、これが大いに茂ったことから、そのすまいを「芭蕉庵」と名付

け、自らも俳号を「松尾芭蕉」と改めました。その愛着ある庵を火事で失ってしまうのですが、この事は芭蕉に「無常観」といったものを深く植え付け、これ以後、頻繁に旅に出る様になります。

芭蕉の残した紀行文(旅行しながら、その土地の事を記したもの)で有名なのは、東北、北陸地方を旅した時の「おくのほそ道」ですが、それ以外にも郷里である伊賀方面への旅で記した「のざらし紀行」であったり、その他多くの紀行文が残されています。

(一峰 小住 義紹)



芭蕉とその弟子河合曾良



禪寺雜記帳

◆政治資金の様々な問題によって都知事を辞任した舛添要一氏の一連の問題には、本当に腹が立ちました。「不適切だが法には触れない」事を承知で、全て確信犯で税金を私していた様子がありあり、本当に狡猾で、こんな日本人がいるのかと悲しくなってしまう。湯河原の別荘に毎週のように泊まり、その往復は公用車。災害など非常時の対応が迅速に出来る筈がありません。美術品をはじめ、私的使目的としか思えない数々の支払いも、家族の旅行や食事さえも税金を流用。海外出張時は飛行機はファーストクラス、宿泊は一流ホテルのスイートルームという贅沢。「東京都のトップが安いホテルに泊まったら恥ずかしい」や「湯河原は奥多摩よりも近い」発言など、東大出ててもこの程度か、とガツカリさせられる

事ばかり、母親の介護をしたという事で世間的にはイメージが良かったようですが、これも嘘だったという報道もあります。もっと早く辞めていれば五十億円もかかるという都知事選挙も参院選挙と合わせて行えた筈です。こんな人をトップに担いだ事は残念だし恥ずかしく、情けなくなります。

◆戦国時代を統一し、泰平の世をもたらした徳川家康は儉約家でした。そこには天下というものは民のものであり、民のものには無駄にしては申し訳ないという確固たる信念があったのです。

◆徳川家康は幼少時代、今川家の人質として静岡の臨濟寺に預けられました。もちろん臨濟宗のお寺で、今も修行道場となっています。ここで住職であり今川家の家臣でもある太源雪齋たいげんせつさいから、人としてかくあるべきという教えを学んだといわれています。その教えも元となり、以後二百六十年も平和な世の中が続くことになるのです。今年臨濟禪師の千五百十

年遠諱の年です。臨濟宗がこのように日本に影響を与えていることを知っていて欲しいと思います。

◆日本人は仏教の教えを通じて、公の意識を強く持つ国民です。個よりも全体の為に、という意識が高いのです。徳川家康がつくった江戸を引き継いだ東京の知事が自分の事ばかり考えるような人間だったのは、本当に残念です。

◆臨濟禪師千五十年の報恩大坐禅会が鎌倉で行われます。建長寺、円覚寺にて十月二十九日〜三十日の土日の予定です。詳細はお彼岸号に記載しますが、折角の機会なので予定を空けてお待ち下さい。

◆毎年恒例の「羽村灯籠流し」が、八月六日(土)十八時三十分から行われます。場所は宮ノ下グラウンドです。当日来られない方も、頼んでおけば当日に故人の戒名などを書いた灯籠を流して頂けます。一基千円です。詳細は各菩提寺にお尋ね下さい。なお雨天の場合翌七日になります。

(禪林 恭山)